

## 百貨店エッセー

昭和33年、小3の私は自転車に乗り冒険の旅に出た。目的地は最近開店した殿町の一畑百貨店。なんでもその屋上には遊園地があり、動く階段(エスカレーター)を備え、とびっきりの綺麗なお姉さんが迎えてくれるという。

辿り着いたデパートは光の殿堂のように輝いていた。一階は総ガラス張りだ。店内の様子を覗くと、眩いばかりの光の中、美しい店員さんや着飾ったお客で賑わっている。なんと煌びやかな!「これが都会の文化というものか!」私は異次元の華やかさに圧倒された。「子供が入っていいんだろうか?」すっかり気後れし扉の前で立ちすくんだ私は、入店することもなく逃げるように家路についたのだった。

ところで一畑百貨店の5階には映画館があり、松江で唯一洋画を上映していた。高校生ともなると、そこはお洒落なデートの場所となる。ある日曜日のことである。一番親

しかった女友達A子とトラブル、別の女の子と映画を見に行った。休憩時間にホールに出ると、なんとそのA子がイケメン男子と来ているではないか。自分のことは棚に上げ、何という奴だと思ったが、目が合うと何とも気まずく、A子も動揺している……。

(この後の展開は

御想像にお任せする)

様々な思い出を残して一畑百貨店が閉店する。コロナ禍やネット社会の進展など原因は種々あろうが、百貨店を支えていた中間層がやせ細ったことがベースにある。一畑百貨店の閉店は地域経済衰退の序章かもしれない。今こそ政治、行政、経済界が一体となり総力を挙げ地域経済の再構築にあたらねば、この地域に未来はない。崩壊はある日突然やってくる。ゆでガエルの轍は踏みたくない。

